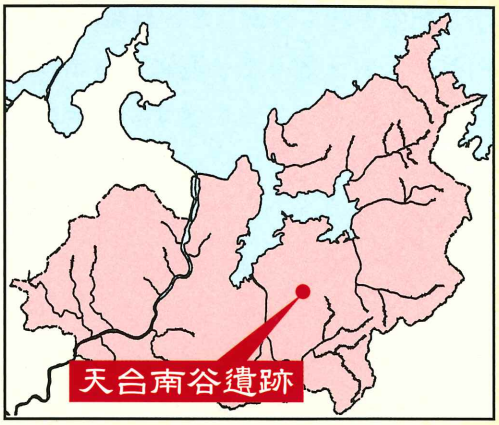
天台南谷遺跡

てんだいみなみだに　いせき

極楽浄土への道

場所：舞鶴市字天台



天台南谷遺跡

丘陵上に並ぶ経塚・古墓

今の天台の集落と天台寺への道との交差する周辺に江戸時代の細川忠興が天台寺の花見で「色も香もあさきのかつら来る人をまつ平りなる山桜哉」と詠んだ「人待ち桜」が周囲を覆うように咲き、また田辺藩の家老であった野田笛浦も詩に詠むなど江戸時代の桜の名所がありました。天台寺はその名前が示すように舞鶴市内で唯一天台宗の寺院として残る寺で、天台宗寺門派の智証大師円珍が開山したとの伝承を残します。文献に登場するのは室町時代に中舞鶴にある雲門寺開祖の普明国司春屋妙葩の詩篇「雲門一曲」の中に「過天台院　感興詩並序」とあり、これが文献に登場する始まりです。その後、江戸時代「京極高直」の時世に、徳川三代将軍家光・四代将軍家綱の位牌を収めるなど田辺藩主によって中興されます。この時代を遡る資料は同寺に伝わる市指定文化財「観音菩薩立像」が平安時代後半のものであることが天台寺の創建年代を知る手がかりとなっています。

この天台寺の西には西方から北方に向かって丘陵が延び、その丘陵上に天台南谷遺跡がありました。この遺跡は丘陵尾根部に14基の経塚と古墓が直線的に配置され造営されるもので東には天台寺を見下ろすことが出来ます。

経塚と古墓は南側に経塚4基、北側に古墓3基が配置されていました。経塚は、1m前後の楕円形の竪穴を掘りその底にトンネル状の横穴を掘り込む形状をしています。横穴の前には板石によって蓋をし、中には板石の上に据えられた経筒が埋納され、その中に経典が入っていました。他の遺跡からは法華経が入っていたようですが、天台南谷遺跡の経典は塊となっており何経か分かりませんでした。その経筒を保護する形で須恵器の甕が口を下にして伏せてあるなど、厳重に経典を保護する施設が造られたことが分かります。甕と鏡の形状から12世紀後半のものと考えられます。

甕の中から経筒

経筒出土状況

中世墓は火葬墓と考えられ、埋め戻した土に白磁・土師皿・刀子が出土し12世紀後半のものと考えられます。丘陵の先端部では箱型に石の部屋を作り、その傍らに土製筒型容器や陶器壷が埋納された施設が造られました。石の部屋の中には何も有りませんでしたが木製の箱が埋納されていたと現時点では考えています。このような中世の遺構で構造が把握でき、土製筒型容器や陶器壷が埋納当時の状況で出土する例はほとんどなく大変貴重な資料となります。

この遺跡に営まれた経塚は平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての期間に築かれたもので貴族から武家へと政権が転換しようとする戦乱の時代の中で末法思想が広がった時期でもあります。末法思想とは末法の世になると法も秩序も無くなり、世の中は荒れに荒れ人心ことごとく乱れるため、弥勒菩薩が下生し衆生を済度する仏滅後56億7000万年の後に弥勒が出生するまで大切な経典を残そうという弥勒信仰から発生したもので、経典を残すための施設として経塚が造営されました。経塚の遺物で最も早い例は、長徳四年（998年）の奥書がある藤原道長埋納の「法華経」とそれを納めた寛弘四年（1007年）在銘の経筒があります。そこには極楽往生が記されていますが、とりわけ末法思想に基づく弥勒信仰とそれに根ざした往生を祈る気持ちが強く打ち出されています。平安時代末になると経塚は盛んに造営され、経塚を造ることに加担することで仏と結縁を結び極楽往生を願うために経塚は盛んに造営されることになります。時代がくだるにつれて現世利益、極楽往生、追善供養として行われるようになったとされます。

天台南谷遺跡は平安時代末から鎌倉時代初頭の時代世相を反映した遺跡で、天台寺の西方に造営された経塚・古墓は極楽浄土への願いを込めて造られたのかもしれません。